

会 議 記 録				
会 議 の 名 称		広報広聴会議		会議場所 第3委員会室 担当職員 鈴木 智
日 時		令和元年7月8日(月曜日)		開 議 午前 10時 35 分 閉 議 午後 0時 07 分
出席委員		◎小川 ○三上(広報部会長) ○赤坂(広聴部会長) 富谷 大塚 並河 木村 松山 奥野		
事務局 出席者		山内事務局長、井上次長、鈴木議事調査係長、山末主査		
傍聴	可	市民0名	報道関係者 0名	議員 0名(-)

会 議 の 概 要

10 : 35

[小川委員長 開議]

[事務局長 日程説明]

1 広報部会活動

(1) 議会だよりの編集状況について

[三上副委員長 説明]

<赤坂副委員長>

このように動いてもらった。皆さんが期待していることである。いろいろとやっていく中で、完璧なものができるようにしていけばよい。税金を使ってやっているの、見てもらえるようなものにしていくべきである。今後も、前向きに考えていって欲しい。

<大塚委員>

斬新なことをすれば批判も受けるが大賛成である。しかし、発行してからでは遅いので、その前に他の会派や議会運営委員会で確認してもらうことは必要である。

<赤坂副委員長>

もちろんそうであるが、ここで前向きに一致団結していこうと考えている。

<小川委員長>

タイトルロゴ等、市民参加の紙面について補足説明をいただきたい。

<三上副委員長>

タイトルロゴ等については、基本は郵送、ファクス、電子メールで出していただく。わがまちトークを実施する際には、コメントをもらえるようにしていく。

<並河委員>

新しい紙面にするのは、9月議会以降であるのか。

<三上副委員長>

紙面の割り振りは変わる。今回は3ページの常任委員会報告を後にして、そこに議員の紹介が入る。2ページに議会トークを入れ、3ページには目を引くような写真や議員にスポットを当てた記事を掲載する。9月議会号では特集する決算の記事を見てもらえるようにする。

<赤坂副委員長>

議会運営委員会に報告する際に、2パターンつくっておいたほうがよいのではないか。

<小川委員長>

議会だよりの紙面改革について、議会運営委員会に報告してはどうかと考えている。

<三上副委員長>

議会だよりを読んでもらうためには何を載せてもよいというものではなく、市民と議会をつなぐツールとして考える必要がある。広報広聴活動を充実させ、紙面を変えていくものである。その都度、批判や意見も出てくると思う。

2 広聴部会活動

(1) わがまちトークについて

[赤坂副委員長 説明]

<小川委員長>

コミュニケーショントークを実施するという意見も出ているがどうか。

<大塚委員>

地域こん談会とわがまちトークとコミュニケーショントークがあるが、それぞれどのような関連があるのか。新たにコミュニケーショントークをつくるのか。

<赤坂副委員長>

自治会では、わがまちトークは3年前にやめたということと言われる。この町ではこういったことが課題になっているということを知りたいために、地域こん談会を傍聴しようと思った。コミュニケーショントークは、話を聞きに行くだけのものとして考えている。わがまちトークの前に、コミュニケーションしておかないと話がかみ合わないの、話をしておくものである。河原林町自治会でも話がしたいということであった。わがまちトークの事前のコミュニケーショントークである。

<小川委員長>

わがまちトークにつなげるコミュニケーショントークであるが、意見をいただきたい。

<三上副委員長>

まずは、行って話を聞き、議会の思いも伝えたいので、わがまちトークに発展させるために、コミュニケーションをとるとして理解すればよいのか。

<松山委員>

コミュニケーショントークはよいと思うが、地域こん談会と同じようにはいけないので、テーマを決めて実施するのがよいと思う。

<赤坂副委員長>

なかなかやってもらえないので、きっかけづくりは大切でありここに出したものである。

<奥野委員>

地域こん談会は、地域の課題について自治会と理事者が話し合う会議である。わがまちトークは、自治会に議員が出向き、いろいろな課題を聞き、その後、委員会で検討するものである。地域こん談会とわがまちトークは別のものである。

<松山委員>

そのことは理解している。コミュニケーショントークは、あくまでも地域の情報を拾うツールである。地域こん談会は、地域の方が意見を述べるものであり、2つのツールがあってもよいと思う。今までのわがまちトークより踏み込んだコミュニケーション手段となればよい。

<大塚委員>

わがまちトークは地域と議員をつなぐものであり、それを充実させるためにコミュ

ニケーショントークを実施するという手段には賛成である。地域こん談会に広報広聴会議委員がどのように参加していくかについては、もう少し練ったほうがよいと思う。

<赤坂副委員長>

議員がいない地域があるということも言われる。意見を聞くことが1つのコミュニケーションである。亀岡市の人口も減っている。地域での意見をつなげるためのシステムを考えていきたい。

<小川委員長>

わがまちトークにつながる意見交換会を広報広聴会議として実施することについて意見はないか。

<木村委員>

わがまちトークは今までどのように広報していたのか。保育所や小学校に呼びかけると、いろいろな方に来てもらえるのではないか。

<三上副委員長>

以前は、議会報告&わがまちトークを、1年間ですべての自治会において実施し、全議員が分担して回っていたが参加者は少なかった。わがまちトークでは、議会としては地域の要望に対し、理事者ではないので、やるともやらないとも言えなかった。理事者のような回答はできないが、議会で調査すべきことはしなければならないので、話はすべて聞くこととしている。それまでは議員が司会をしていたが、自治会の人に司会をしてもらい、テーマを決めてまちづくりを考えることとした。議会としては市の予算を説明し、こういったことに力点を置いているという説明はできる。これにより説明責任も果たせることになる。西部地域では来年も実施したいということを書いていただいているところもある。今のわがまちトークのよさをPRすることが大事である。

<小川委員長>

第16期では、各地域でテーマを決めて意見交換を行い、議会報告会の課題等を後半になって克服してきた。わがまちトークも実施できるように持っていきたいと思っている。広聴部会から提案のあった、わがまちトークにつなげるための下準備の意見交換をどうするかについて意見を聞きたい。

<松山委員>

4カ所から希望をいただいているので実施できればと思う。

<木村委員>

大井町は各種団体が固まっている。テーマは自治会で考えられるのか。

<赤坂副委員長>

テーマとしてはすでに来ている。大井町自治会には、思っていることを書いてもらえばよいと言ってきた。日程はいつでもよいということにしており、時間が空いた時に行って、ざっくばらんに話をすることである。

<大塚委員>

わがまちトークの日程はどうなっているのか。

<小川委員長>

6月末で応募を締め切った結果、わがまちトークを希望される自治会はなかった。4カ所については、わがまちトークにつなげるために意見交換を実施することとされている。そして、テーマを決めてわがまちトークを実施できればと考えているものである。正式にわがまちトークを実施するという事は聞いていない。

<富谷委員>

私が1期目の時に、わがまちトークに行ったときに、どれだけこの地域・自治会のことを知っているのか、1人ずつ話を聞きたいと言われた。自分の自治会のことをある程度知ってほしいと思われている。このように事前に自治会のことを知る機会があるのは意義のあることだと思い、部会長の意見に賛成した。

<三上副委員長>

地域こん談会との違いを自治会にしっかりと伝えていくことが大事である。要望をどうしていくかではなく、地域の思いを共有し、しっかりと知ることが大切である。我々が知っていることを伝えるのが主な目的であり、要求を実現するために議員を呼ぶのが目的ではない。逆に言うと、新たな発想やヒントを得られるものにしていきたい。自治会が持たれているわがまちトークに対するイメージは、過去の段階で止まっているのではないかと思う。

<並河委員>

わがまちトークで自分が知らない地域の課題を知ることで、亀岡市全体を見ることが出来る。私の住む地域ではこんなことをしているという紹介もできて、お互いの信頼関係を築けた自治会もあった。要望を議員に言ってもなかなか実現できない。去年の災害の時も、一般質問で何人もの議員が質問したこともあった。回を重ねることで、議会と地域との信頼関係も出てくるので、手始めにやっつけていけばよいと考える。

<小川委員長>

広報広聴会議の委員が入り、わがまちトークをやって欲しいということが言いたいのだと考える。これを議会運営委員会に報告したいと考える。また、地域こん談会の傍聴については、どのようにしていけばよいか。

<奥野委員>

個人として地域こん談会に参加するのではなく、議会全体としての動きになるので、議会運営委員会で十分協議して諮ることが必要である。

<三上副委員長>

篠町では議員5人が自治会の顧問となっており、地域こん談会に出席することとなっている。このように議員が深く関わっているところもあるが、議員が出席しないところもある。広聴部会は広く市民の願いを知っておくことが仕事であり大義名分にもなる。全議員が分担して傍聴するのか。どういう諮り方がよいかわからないが、広聴部会が広聴活動として実施するので、自治会から許可を得たところだけ傍聴に入り、不要だと言われたらそこには入らないこととなるのではないか。

<奥野委員>

議会運営委員会できっちりとルールを決めておく必要がある。

<並河委員>

地域こん談会では、地域の要望への回答が主なものであり、その進捗状況はわかる。以前のわがまちトークでは、地元議員は行かないというルールにしていた。これは議論して欲しい。

<小川委員長>

地域こん談会よりも、わがまちトークの実施を呼びかけるほうがよいのではないか。

<赤坂副委員長>

地元議員がわがまちトークに行かないこととしているのは理解できない。これは自治会長も言われている。亀岡全体のことを考えていく時代である。情報を叩き込んでおくのが広報広聴会議の仕事である。市議会はこれだけ変えていこうとしているのを見てもらいたい。議会運営委員会でも理解してもらい、もっと信頼されるよう

な形をつくりたい。

<三上副委員長>

できるだけ地域の催しには参加するという方向性を打ち出しておくのもよい。地域こん談会はすでに始まっており、これから議会運営委員会で協議するのであれば、出席できないところも出てくる。意味はあることなので、来年度に向けて体制を整えることもよいと考える。終わっているところはどうするかについては、検討が必要である。

<小川委員長>

次の議会運営委員会は7月17日に開催される。それまでに地域こん談会が終わってしまうところもある。広報広聴会議としての方向性をまとめたいがどうか。

<松山委員>

地域がよりよくなるために、市民の声を議員が反映させていけるかが結果につながる。市民の声を聞くためのツールであり、やっていく必要がある。亀岡市全体のことを考える必要があり、町の意見が点としてあるだけで、それらを全体として結べていない。全体として見ていくためには、この活動は必要である。議会運営委員会で諮っていただきたい、今までにないような方法で、結果を出せるように切磋琢磨できればと考えている。

<三上副委員長>

やろうとしていることに対してはだれも反対はない。広報広聴会議として地域こん談会に参加することは、議会運営委員会に持っていける内容である。地域こん談会の主催は亀岡市であり、議員が行くことに対しては理事者の思いもあり、承諾をもらわなければならない。すでに終わっているところもあり、次年度から実施できるように、理事者から了解をもらわなければいけない。これを議会運営委員会で判断してもらってはどうか。今年はだめだと言われたら仕方がない。地域こん談会よりもわがまちトークを充実させ、よいものができるように力を入れたらよいと考える。

<小川委員長>

地域こん談会の傍聴に関して、広報広聴会議の考えは議会運営委員会に伝え、判断してもらうこととする。今後の課題として、わがまちトークの実施に当たり、意見が出てきたら協議していきたい。

<事務局長>

コミュニケーショントークについては、わがまちトークにつなげるためのものであるが、対象者は自治会にお任せするのか。議会としては、広報広聴会議のメンバーが出席するのか。議会運営委員会に投げかけるときに、その辺りを整理いただきたい。地域こん談会は、理事者と自治会が実施されることが基本であり、その上での理解が必要となる。議会としては議会報告会、わがまちトークを実施いただく。

<小川委員長>

わがまちトークについては、現在4カ所から希望がある。広報広聴会議として取り組むが、どういったメンバーになるのか。

<三上副委員長>

今までから、わがまちトークを実施する際に事前調整しているが、形式的なものであったかもしれない。わがまちトークを実施し、お互いに情報を共有し、地域や亀岡市全体のために考えていこうとするものである。コミュニケーショントークを新たに実施するのであれば、もう少しアバウトな考え方でよい。よくつながり、よいものをつくるために広報広聴会議が事前に話に入るものである。新しい仕組みについての話になるのではないか。結果としてわがまちトークにつながらなくてもよい。

<小川委員長>

広報広聴会議で事前の調整を実施することでよいか。

<大塚委員>

例えば、東別院町や西別院町であれば、齊藤議員が出席されるように調整するのか。来るか来ないかは本人の判断であるが、とりあえず全議員に声だけは掛けておく必要があるのではないか。

<赤坂副委員長>

コミュニケーショントークとして実施するものであり、声をかける必要はない。わがまちトークを実施するとなると、声をかけることになる。普通に話をしたいというものである。全員が参加するとなるとかたくなってしまう。最初であり軽く考えておいて、次にきっちりとやればよい。

<事務局長>

広報広聴会議の正式な活動ではなく、これまでからのわがまちトーク実施に向けた事前調整という位置付けでよいのか。

<三上副委員長>

今まではこういうことを実施するとして募集していたが、わがまちトークまでに、思いを共有しておくことが大事であることを強調し、議会運営委員会に報告すべきである。わがまちトークをよりよいものにすることはどういったことであるのか。地域の要望を聞くだけではないということ共有し、やってみたいと思ってもらえるようにすべきである。

<小川委員長>

広聴活動の下準備として意見交換できればと考える。

3 その他

(1) 議会だよりの配布拡大に向けた取組みについて

[事務局長]

- ・市内のスーパーマツモト、イオン、西友、JR各駅に議会だよりを配布してはどうかと考えるものである。これは、議長等から提案のあった内容について具現化するものである。亀岡市の広報紙はすでに配置されている。協議が整えば、議会だよりNo.181の発行から実施する。まずは、既決予算内で執行するため、各施設へは10部程度配置することを考えている。今後はコンビニへの配置も考えられるが、執行部との歩調を合わせる中で、協議していきたいと考えている。

<三上副委員長>

結構なことである。駅前で若い人に、議会だよりを見たことがあるか等について、直接聞いてみて、肌で感じる事も大事である。このような取組みも実施していきたい。スーパー等に置くことはよいと思う。

<小川委員長>

各店舗に話はできているのか。

<事務局長>

執行部はすでに各店舗等に配置しているので、議会だよりを置くことがだめだということにはならないと考えている。

<赤坂副委員長>

飲食店に置かせてもらってはどうか。

<小川委員長>

移住・定住の取組みの一環として、このような事業があったのではないか。

<事務局長>

そこまでは把握していない。

<小川委員長>

この件についても議会運営委員会に報告することとする。

散会 0 : 0 7